特集

生物・物理・化学の力を総合的に利用した
トマト地上部病害虫の新防除体系

新規忌避剤アセチル化グリセリドによるトマト黄化葉巻病の防除効果

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
九州沖縄農業研究センター 野菜病害虫管理グループ
北村登史雄（きたむら としお）

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業研究センター 病害研究領域 病害防除体系グループ
大西純（おおにし じゅん）

石原産業株式会社
加嶋崇之（かしま たかゆき）

はじめに

トマト栽培では受粉にマルハナバチ類を使用するため，これを利用している間はマルハナバチ類に影響の少ない殺虫剤しか使用できない。マルハナバチ類の導入に伴い1990年代頃から微小害虫に対して天敵の利用を中心とした総合防除体系が普及し，オンシツコナジラミ，ハモグリバエ類を対象にオンシツツヤコバチ，ハモグリミドリヒメコバチ等が生物農薬として市販され使用されるようになった。しかし，タバココナジラミMEAM1（バイオタイプB）が1980年代に，これが媒介するトマト黄化葉巻ウイルス（以下，TYLCV）を原因とするトマト黄化葉巻病が1990年代に侵入すると防除体系は物理的防除法と殺虫剤を中心としたものに変化した。トマト黄化葉巻病に感染すると感染部位以降の着果が見られず，大きな減収となることや，タバココナジラミのトマト黄化葉巻病に対する媒介能力は高く，トマト黄化葉巻ウイルスを保毒したタバココナジラミが栽培施設内に極少数残存しても本ウイルス病がまん延する危険性がある（図-1，2）こと，また，コナジラミ類の天敵として普及していたオンシツツヤコバチがタバココナジラミに対してオンシツコナジラミほどの密度抑制効果を示さなかったことも防除体系の変化の要因と考えられる。ネオニコチノイド剤を中心とした防除体系が普及したが，ネオニコチノイド剤をはじめ多くの殺虫剤に対して抵抗性が発達したタバココナジラミMED（バイオタイプQ）が海

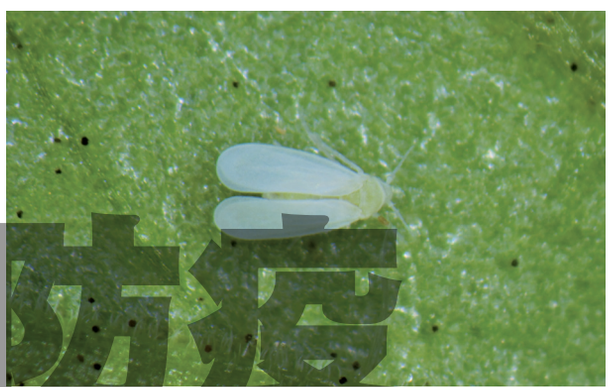

図-1 タバココナジラミ バイオタイプQ 雌成虫

図-2 トマト黄化葉巻病感染トマト

Control of Tomato Yellow Leaf Curl Disease With A New Repellent, Acetylated Glyceride To *Bemisia tabaci*（Gennadius）. By Toshio KITAMURA

（キーワード：タバココナジラミ，トマト黄化葉巻ウイルス，媒介抑制，食品添加物）